

実践報告

## 大学の授業における「ボランティア」の教育方法に関する一試論 —山口県立大学「ボランティア」の授業実践から—

A Tentative Approach to Ways of Teaching “Volunteering” in a University Class

藤田久美  
Kumi FUJITA

### はじめに

近年、ボランティアの社会的役割やボランティア学習における教育的意義が注目され、大学におけるボランティア活動支援の重要性が提唱されるようになった。文部科学省においても、学生ボランティアに対する奨励・支援に関する対策が講じられている。具体的には、①ボランティア・サービスマネジメント・NPOに関する科目の設置②インターンシップを含め学生の自主的なボランティア活動の単位認定③大学ボランティアセンターを設置など学内制度の充実④セメスター制度やボランティア休学制度の導入等による活動を行いやすい環境の整備⑤学内におけるボランティア活動の機会の提供等である<sup>注1)</sup>。

青少年の発達課題である生涯学習のスキルや対人関係能力の形成といった発達を促進することを鑑みても、大学におけるボランティア教育を積極的に推進していく意義は大きい。しかし、ボランティアの単位化に関して、様々な議論が展開されている。例えば、ボランティアの理念・性質である「自主性」をどうとらえるか、ボランティア受け入れ先と大学がどのように連携して、教育目標を共有化することが必要であるか等が挙げられる。

また、ボランティア活動の「相互性」という性質から、学生への教育ニーズを満たすことに加えて、受け入れ先のニーズを考慮した教育方法や工夫も求められている。例えば、大学ボランティアセンターを設置して、開講授業として、地域貢献

を重視したプログラムを立案・実施し、教育と地域貢献を有機的に結合させた画期的なプログラムを報告している大学もある<sup>注2)</sup>。大学に課せられた「地域貢献」という観点からは、授業の一環として、ボランティア活動を行うことで、地域における社会的役割を知り、自主的・主体的に地域社会に貢献する心を涵養することの意義もある。

このような背景の中、大学における授業としての「ボランティア」の教育方法や、学生の成長や地域社会への影響がどのようなものであるかについて関心も高い。また、専門職養成の大学においては、ボランティア体験を義務づけた教育プログラムの開発も行われている<sup>1)</sup>。本学においては、平成15年に基礎・教養科目「ボランティア」が正規科目として設置されて以来、授業実践を通して上述したような意義や課題を整理してきた。また、社会福祉実習教育と関連づけた体験学習を「社会福祉演習」(社会福祉学部2年次開講科目)などの演習の授業を通して半自発的体験として対象者に直接かかわる学習を導入し、その体験を自発的なボランティア活動に移行するために、福祉施設・福祉NPOと連携し、休日や長期休暇のボランティア活動を紹介・奨励し、これらのボランティア活動と実習教育との関連を検討してきた<sup>2) 3) 4)</sup>。さらに、ボランティア活動を学生の日常の活動につなげていくことができるような活動支援と教育環境の整備を行うことの重要性から、ボランティア情報の提供やボランティア啓発を行うための学生を主体とした団体を組織化し、その支援を行っ

てきた<sup>注3)</sup>。この取り組みと連動させつつ、大学における「ボランティア」の授業実践をとおして、大学の授業におけるボランティアの方法論の構築に向けて検討を積み重ねてきた<sup>注4)</sup>。本稿は、山口県立大学の基礎・教養科目「ボランティア」の5年間の授業実践をもとに、大学の授業における「ボランティア」の教育方法のあり方を探求し、今後の課題を提示すること目的とする。

## 1 授業実践から「ボランティア」の教育方法論の構築

### 1) 5年間の授業実践の整理と方法論の構築に向けて

平成15年度に新設された教養科目「ボランティア」は、後期開講の全学を対象とした選択科目である。学習プログラムには事前・事後学習が必要不可欠である<sup>注5)</sup>ため、開設した当初から、事前学習→体験学習→事後学習の流れで実施してきた。体験活動（ボランティア実践）の受け入れ先は、市内の市民活動支援センターや社会福祉協議会から紹介される活動や団体、大学に直接依依頼があった団体を紹介した。その中から学生が活動や団体を選択した。

学生の実態は、社会福祉学部学生が毎年9割を占めており、看護学部・栄養学部（現看護栄養学部）、生活環境学科、国際文化学部の受講生は若干名である。学年は1年生が9割以上を占め、入学後のボランティア体験はボランティア系サークル活動における体験を含めて約2割程度であった。受講動機は「ボランティア活動を行うきっかけがほしい」という学生が8割を占めた。このような学生の実態や学びのニーズを加味し、授業計画に基づきながら、5年間の授業実践を通して検討を重ねてきた。

ここでは、①教育目標・内容・方法、②体験活動の場の確保、③教員の指導体制、④評価の方法の項目について整理しながら、教育方法の構築に向けての実践概要を報告する。

### (1) 目標・内容・方法について

#### ①目標

平成15年度（開講初年度）には、目標を決定するために、文部科学省から出されている青少年のボランティア教育関係の資料や他大学の取り組み、ボランティア関係の文献等から教材研究を行った。その上で、大学の教育理念と基礎教養科目の位置付けを考慮して、学習目標を設定した。達成目標は、「ボランティア学習をとおして、地域社会に貢献する心を育み、身近な生活の課題や地域社会問題の理解と社会の参加を目指す」とした。

目標は、学生に配付しシラバスに明記することに加えて、オリエンテーションや授業時に学生に伝えた。しかし、口頭で伝えるだけでは意識化されないことや、学習目標を十分に理解せずにボランティア活動を行う学生が見られたこと、ふりかえりシートや最終レポートの記述に学びが深められていないといった内容が散見された。そこで、平成17年度（3年目）の授業からは、学習目標をより明確化し、学生に提示できるようにした。例えば、授業時に口答で伝え、さらには板書やレジюмеに明記した。平成18年度からは、評価の観点を設定し、それを学習目標に掲げた。

#### ②教育内容・方法について

##### 〈事前学習・事後学習の内容と方法〉

オリエンテーションを含めた事前学習においては3コマ分を設定し、ボランティアのボランティア先メニューの提示とボランティア先と学生とのコーディネートを行った。また、ボランティア活動に関する基礎的知識とボランティアマナーなどの注意事項を学生に伝える時間を設定した。2年目の反省点として、単なるボランティア論の知識を注入するだけでは受講生に具体的なイメージ化が図れないことや、これから行う体験とボランティアの理論をどう融合化させていくかの課題意識を醸成する必要性が挙げられた。平成18年度（3年目）には、学生ぶちボランティアセンターの協力を得て、スタッフがコーディネートの補助を行った。平成19年度からは、社会福祉学部の専門

科目である「福祉ボランティア論」の受講生のボランティアコーディネイト体験の演習として、活動体験者として、ボランティア先の紹介と学生の相談を行うようにした。事前学習では、ボランティア初心者がほとんどである学習者のレディネスを形成するために、ボランティア活動をする準備段階としての学習内容を含むようにした。

事後学習では、グループワークを活用し、体験を意味づけるための省察的活動を他者と共有しつつ、個の学びに繋げるための学習形態で行った。また、最終レポートを課題とし、レポート作成の作業過程において、実践と理論の融合化を図ることや、自身の体験と学びの協同体（受講生同士）の中で生成した理論を構築できるように指導を行うことにした。このような指導を加えることにより、最終レポートの記述内容の質が向上した。

さらに、学生がボランティア活動をより深く学ぶための、サブテキストを使用することで教育効果が高められることから、平成19年度に、教科書を作成し、教材として活用することにした<sup>注6)</sup>。

#### 〈実施時期〉

初年度は後期の日程通り実施したが、学生の活動時間が確保しにくいという点があり、2年目の平成16年度より、7月の補講期間に事前学習を実施し、夏休みに活動ができるように考慮した。後期が開始された2週間後の授業時に中間報告会を実施し、その後11月下旬から12月までの5コマ分で事後学習と報告会を実施した。最終レポートの提出は、授業全体をふりかえりつつ、自らの体験を理論化する時間を考慮し、1月中旬を提出期限にした。

#### 〈学習形態〉

初年度の授業実践の反省から、活動前に不安の軽減や学生同士の学び合いの形態を取り入れる重要性が検討された。3年目（平成17年度）からは、事前学習で、ボランティア活動をすでに行っている先輩と出会う場を設定するために平成16年に設立された学生ぶちボランティアセンターの開放日を活用し、学生スタッフのコーディネートを先輩の体験談を導入した。平成18年度より「福祉ボラ

ンティア論」（社会福祉学部専門科目）の受講生のボランティアコーディネイト体験の演習で「ボランティア」の受講生へのサポートを行った。

活動先が同じ受講生とのグループを構成し、ボランティア活動に行く前の準備にあたって協同作業を行い、情報交換ができるように考慮した。

事後学習においてもグループ学習を導入した。平成16年度までは、同じ活動先の受講生同士のグループワークによる体験の共有を行った。しかし、報告会で全体共有した感想に、「活動先の違う人とのボランティア体験を共有したい」といった声が聴かれたため指導の方法を検討し、活動先の違うグループ学習を実施することにした。グループでの学習を通して見えてきたことや感想などを全体で共有し、教員の講評を行った。全体共有と教員からの講評により、学習者の思考がより深まることが学生の感想から見られた。したがって、グループ発表の時間と講評の時間を十分に取ることが検討された。報告会では、全員が一人ずつプレゼンテーションできるように2コマ続きで実施した。プレゼンテーションは活動先ごとに行い、教員や活動先からのコメントを加えることによって、ボランティア活動の意義を明確化できるように考慮した。

#### （2）体験活動の場の確保

ボランティア活動先の確保と活動メニュー作成は、山口県ボランティアセンターや山口市市民活動支援センターなどの中間支援機関を活用した。平成16年度（2年目）には、体験活動が夏休みから実施できるようになったため、学生の帰省先のボランティアセンターや社会福祉協議会を活用し、地元でボランティア活動ができるようにした。しかし、帰省先での活動は、距離的な問題も含め、大学と施設・団体との連絡・調整が難しい点が挙げられた。したがって、担当教員で検討した結果、4年目からは、山口県内の施設・団体をボランティア活動の場にするに加え、大学にボランティア要請依頼のある活動先に、担当教員が直接交渉し、教育の目標を理解していただき、授業として

のボランティア活動を受け入れてもらうようにした。

### (3) 教員の指導体制

授業の計画と主な進行は社会福祉学部教員（筆者）が行った。その他の担当教員は国際文化学部1名、看護栄養学部1名、生活環境学科1名（平成18年度まで）、地域共生センター1名（平成18年度のみ）、共通教育機構1名（平成21年度より）である。平成17年度からは、山口県内で活動するボランティアコーディネート実践者を外部講師として招いた。事前講座の学習に参加してもらうことにより、学生への教育効果が高まることが期待されるのではないかと検討し、本学の非常勤講師として2コマ分を依頼した。また、教員のコンセンサスを図るために、授業の進め方についてミーティングを開き、目標と授業内容・方法を共有した。事前学習の授業時間前のミーティングを実施、授業案や学生配付のレジュメを添付するなど連絡をとりあった。教育方法がある程度安定する平成18年度（3年目）までは、学生の成績評価の際に授業後の会議を開催し、授業実践の反省・評価を行い、次年度の授業計画に反映できるようにした。学生の振り返りシートをコピーして閲覧し、学生が授業を通して何を学んだかを共有して、授業時のコメントを述べる際に、専門分野からのコメントやアドバイスを提供した。

### (4) 評価の方法

成績評価については、平成17年度までは4段階評価、平成18年度は5段階評価（平成18年入学生より5段階評価規定）であったが、平成19年度より、実習系の授業と性質を考慮し、合・否の2段階の評価に改訂した。加えて、授業中の学生の様子や報告会における発表を通じて、一人ひとりの学びの成果や人間的成長を評価する観点が必要であることを検討した。したがって、ボランティア学習の性質上、単なる「合」か「否」ではなく、評価の観点を設け、学生自身が、学習時の目標と連動させた個々の評価を意識できるような授業の

仕掛けを行った。活動先からの量的評価は実施せず、教員の訪問あるいは電話連絡にて、学生のボランティア活動の様子については評価の観点の一つである「関心・意欲・態度」を中心に聞き取りを行った。そのことについては、報告会時に、学生に全体的な講評の中でフィードバックを行えるようにした。学生のふりかえりの学習過程からは、ボランティアに対する否定的イメージや自己を肯定することのできない体験を思い起こし、自信をなくしてしまうような学生もあったため、教員からの教育支援に加え、相手先からの評価を効果的に導入することの必要性が検討された。相手からの評価は、学生がボランティア活動の意義を考察する機会にもなることから、活動先からの評価を口頭で授業時に伝えるように配慮した。平成18年度からは、活動先ごとに聞き取りを丁寧に行い、報告会時に、そのことを伝えるようにした。

## 2) 平成20年度「ボランティア」の授業実践から

5年間の授業実践と検討を積み重ね、平成20年度の授業を計画・実施した。ここでは、平成20年度の「ボランティア」の授業実践を報告する。大学における授業としての「ボランティア」の教育方法や教育支援について授業実践と学生の様子から整理してみたい。

### (1) 授業実践の概要

#### ① 授業の目的

- ・ 個々の興味・関心や専門分野に関連するボランティア活動に参加する。
- ・ ボランティア体験で得た学びを、他者と共有することを通して、学習を深化させる。
- ・ 個々の体験から得たものを言語化し、報告会にて発表することができる。
- ・ ボランティア学習をとおして、地域社会に貢献する心を育み、身近な生活の課題や地域社会問題の理解と社会の参加を目指す。（達成目標）

#### ② 学習プログラム

平成20年度の学習プログラムの概要を表1に示



した。

③評価の観点

評価の観点は、到達目標を達成するために、以下の4つの観点別評価に分けて整理した(図1)。

評価の観点を設定し、オリエンテーション時及び講義ごとに学習目標と連動させ、学生に伝え、受講生が「何を学ぶか」という意識を持つことができるように導いた。

表1 平成20年度の学習プログラムの概要

日 時	学習内容及び学生の活動	教育支援及び準備物等
事前学習 3コマ分 7月24日 7月28日 7月30日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>・先輩からの活動先紹介 先輩の体験談を聴き、ボランティア受け入れ先での活動をイメージする。</li> <li>・ボランティア活動の基礎的理解</li> <li>・ボランティアに行く前に 講義を受け、感想・気づきをワークシートに記述する。</li> <li>・外部講師「ボランティアの社会的役割」 講義を受け、感想・気づきをワークシートに記述する。</li> <li>・活動先決定及び先輩との情報交換 活動計画や活動先との連絡調整をする。 先輩からの情報を聴き、質問する。</li> </ul>	<p>毎回、ふりかえりのワークシートを記述させ、学習者の学びを評価する。</p> <p>学生が抱えている不安や戸惑いの部分を言語化させ、授業中にフィードバックする。また、先輩との情報交換の時間を設けることによって、具体的な活動のイメージがもてるように配慮する。</p> <p>◆準備 ・レジュメ ・ワークシート</p> <p>◆教材・教科書 ・ボランティア実践受け入れ先紹介パネル ・ボランティア活動先紹介パワーポイント(福祉ボランティア論受講生成成) 「大学生のためのボランティアハンドブック」 ふくろう出版</p> <p>◆ゲストティチャー及びアシスタント 非常勤講師の講義(1コマ分) 福祉ボランティア論受講生参加</p>
体験活動 (ボランティア実践) ◆8~10月に21時間分 (受け入れ先11ヶ所)	<p>個々の興味・関心や専門分野に関連するボランティア活動に参加し、記録を書く。</p> <p>選択したボランティア活動先でボランティアの体験をする(21時間)。</p> <p>ボランティア体験記録を書く。</p>	<p>◆教育支援 活動中の困り事などについて教員にメールや電話連絡できるような体制を整備する。 リスクマネジメントの指導を行い、ボランティア中の事故やけがへの対応と大学の窓口を伝える。</p> <p>◆準備物 活動先との連絡、調整、訪問を行う。 体験記録シート(フォーマットを配付) サブノート(学生が準備)</p>
事後学習 6コマ分 10月 中間報告 11月・12月 事後学習	<p>&lt;中間報告&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の実際をシートに記入し、中間報告を行う。活動先別グループから一人代表で中間報告を行う。</li> </ul> <p>&lt;事後学習&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ学習で実施</li> <li>・「光と影(陰)」のグループワークを通して活動体験を分かち合い情報交換</li> <li>・大学生にとってのボランティア活動の意義について考察する。</li> <li>・ふりかえりシートに、学習のふりかえりを記述し、個々の学びのふりかえりや自己評価を行う。</li> </ul> <p>&lt;報告会&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティア実践を通しての学びについて3分間で報告する。レジュメ、原稿を作成する。</li> </ul>	<p>◆教育支援 ・グループワークの司会進行を行う。 ・机間巡視を行い、学生の様子や学習状況に合わせて支援を行う。 ・ふりかえりシートに記述するポイントを助言する。 ・評価の観点を示し、学生の学びや自己評価を明確化する</p> <p>◆準備物 授業レジュメ、ふりかえりシート、模造紙 発表用レジュメ(学生が準備) ポストイット、マーカー</p> <p>◆外部講師、参加者 非常勤講師(3コマ分) 受け入れ先団体の職員</p>

## (2) 授業実践の風景から

平成20年度に実施した授業実践をふりかえりながら、授業の風景（観察記録）及び学生の記述したワークシート（ふりかえりシート）等の資料をもとに報告する。体験活動であるボランティア活動は、実際に活動していた学生の様子を観察したものと活動記録及び活動先のスタッフへの聞き取りをもとに報告する。

### ①事前学習

オリエンテーションと先輩からの活動紹介（平成20年7月24日）では、41名の学生（社会福祉学

部38名、国際文化学部2名、全員1年生）が参加した。すでにボランティア活動を行っている体験者（「福祉ボランティア論」受講生、2年、3年、4年）らは自ら授業で体験とルポ活動を行った施設・団体についてのパネル展示及びプレゼンテーションを行い、1年生に向けて活動紹介を行った。プレゼンでは、①団体・施設の紹介②ボランティア体験談③ボランティア活動の際の注意事項（マナー、持ち物など）について説明された。受講生らは真剣な表情で聴いている様子であった。授業のふりかえりシートには、「ボランティアに行く

### 【到達目標】

ボランティア学習をとおして、地域社会に貢献する心を育み、身近な生活の課題や地域社会問題の理解と社会の参加を目指す。



### 【評価の観点】

#### 〈関心・意欲・態度〉

- ・ 個々の関心や専門分野に関連するボランティア活動に積極的に参加することができたか。
- ・ ボランティア体験を他者と共有するためのグループワークに積極的に参加し、他者の意見に耳を傾け、自分の思いを言語化することができたか

#### 〈知識・理解〉

- ・ ボランティアの理論・性質について講義と体験を通して理解できたか
- ・ 活動先におけるボランティアの社会的役割を理解できたか

#### 〈思考・判断〉

- ・ 受け入れ先の施設・団体の事業目的を理解し、大学生ボランティアとしての社会的役割について考察することができたか
- ・ ボランティア体験で得た学びを振り返る作業を通して、個々の学びを深めることができたか

#### 〈技能・表現〉

- ・ ボランティア体験を振り返る作業として「記録」を記述することができたか
- ・ グループワークで個々のボランティア体験から得られた学びを言葉で表現することができたか
- ・ グループワークで他者の意見・思いに耳を傾けて聴くことができたか
- ・ 報告会で発表するための原稿をまとめ、プレゼンテーションをすることができたか

図1 ボランティア教育における評価の観点

のは始めてなので不安だったが、先輩達が楽しそうに活動を紹介してくれたので楽しみになった」「高校の時と違い、自分で時間などを決めて自分で行くので責任を持っていかないといけないと思った」「大学に入学してボランティアをしようとしていたので授業をとおしてしっかり学んでからと思っていた。今日、オリエンテーションで授業の目的や内容を聞いてとても楽しみになった」などが記述されていた。

授業後に、筆者の研究室に訪れた学生から、「授業では1つの活動場所しかいけないけど、先輩の活動紹介を受けてもっといろいろなところに行きたいと思ったので行ってもいいですか」や「高校の時にイメージしていたボランティア活動と違う。すごく楽しみになりました」という声が聴かれた。

受講生は、4日後（平成20年7月28日）の正午までに活動先を決定し、シートを担当教員に提出した。同日の午後から事前学習の2回目（一コマ分）を実施した。ここでは「ボランティアに行く前に」というテーマで、担当教員（筆者）からの講義を行った。その際に、前回のワークシートに記述された質問に一つずつ答える時間を設けた。講義では、大学で作成した教科書<sup>注7)</sup>を使って、ボランティアの理論・性質を一つひとつあげながら、大学生の活動を具体的にあげて論じる講義を行った。続いて、活動先を紹介した体験者（福祉

ボランティア論受講生）との情報交換の時間を設定した。福祉ボランティア論受講生は、自らの体験やボランティア先のスタッフから聴き取りした内容（ボランティアを必要とする理由、ボランティア活動内容、注意事項など）をふまえて、受講生らに説明したり、質問に答えたりしていた。受講生は、次第に表情も明るくなり、積極的に質問する姿も伺えた。

事前学習3回目は、本学の非常勤講師からの講義を行った。ボランティア活動を市民活動促進の立場から捉え、中間支援機関としての事業展開を行っている講師の立場から、地域における福祉NPOやまちづくりにおけるボランティア活動の社会的役割と意義について概説する講義を受けた。学生らも外部講師による講義を熱心に聞き入っていた。特に「嫌われボランティア」についての説明を受けたときは、真剣な表情で聴いていた。講師からは、「マナーを守って自分にとっても楽しい活動をしてほしい。自分も楽しまなければ相手に喜びは与えられない」というメッセージを受けた。学生の感想からは、「地域でボランティアをコーディネートしている方の話を聴いてとても興味をもった」「地域にはたくさんのボランティアをしている人が存在していて、その人達の活動は社会をよくするための重要であるということが理解できた。」「ボランティアにもっと興味を持つことができた」という感想が見られた。

表2 事前学習の授業レジュメ概要

事前学習2回目	講義「大学生とボランティア」
1)	ボランティアとは
2)	ボランティアの性質と大学生の活動 (自主性、社会性・公共性、先駆性・開拓性、無償性、学習性、継続性)
3)	ボランティア活動のはじめの一步
4)	ボランティアで何が学べるか、学ぶか
5)	大学生ボランティアの社会的役割と意義
6)	ボランティアに行く前に (教科書 p92) 「ボランティア活動者の心得」
7)	前回の質問から

## ②体験活動の実際

ボランティア活動の場は、児童養護施設や子育て支援施設、精神障害者のデイサービス、障害児・者のデイサービス、地域交流のためのNPOなど全11ヶ所で行われた。学生が個々に時間を選択し、活動先との調整を行っていった。その中の2ヶ所の活動を報告する。

〈A子育て支援施設（NPO運営）にて〉

A施設は未就園児とその親が集う場である。開設当初から、ボランティアの受け入れと育成を積極的に行っている。学生ボランティアの役割は主に乳幼児と一緒に遊ぶことである。ボランティアを選んだある学生は「子どもが好きだから」という理由で活動先を選択した。「子どもと仲良くなれるだろうか」と不安な気持ちをいできて参加したという。学生は、子どもと一緒に砂場で遊んでいた。砂場では、2歳の男児が3歳前の女児と一緒にプリンカップに砂を入れては出していた。学生はその子らの遊びをそばで見守りながら、必要に応じて子どもの要求に応じている。子どもは「楽しいね」「おもしろいね」など自分の思いを共感してもらってとてもいい笑顔を見せている。同時に学生も子どもと目を合わせながら一緒に笑っている。短い時間ではあるが、すっかり学生の存在を意識し、一緒に遊んでくれる人と認識しているように見えた。その相互交渉はとても微笑ましい光景である。砂場が見えるところでは子どもの母親と見られる人が、スタッフや他の母親と談笑をしている。母親は穏やかな表情で子どもと学生を時々見つけ、安心した表情で会話を続けていた。

受け入れ先のスタッフは、「大学生ボランティアの方が子どもと一緒にいてくれることで雰囲気が明るくなる。若い人のもっているパワーや純粋さは私たちの活動の場に必要と実感。そして、子どもを見守ってくれている間、子どものお母さんはお茶をのみながら利用者やスタッフとの会話を楽しめるのです。ここの施設の目的の一つである〈ママたちの居場所、情報交換の場〉だから。」と語ってくれた。学生の感想からは「子どものパワーはすごいけど、一緒にいるだけで楽しい気持ちになる」とあった。また加えて「帰ってからすごく疲れていた。体力が必要と思った」と語った。

〈B施設（NPO運営の高齢者・障害者・子どもの地域における交流の場）〉

B施設は、商店街に位置し、高齢者・障害者・子どもの交流の場、本学の社会福祉学部の授業にも協力を得てきた施設である。筆者が学生のボランティア活動を実践している場に訪れたとき、はじめてボランティアに来た学生Cが活動している時であった。そこには常連の利用者として80歳代と70歳代の高齢者が談話していた。スタッフが学生を紹介すると学生は恥ずかしそうに挨拶をした。高齢者の一人から一緒に座るように声をかけてもらうが少し戸惑う顔を見せる。しかし、「どこの出身?」「大学の勉強は何をしているの?」など利用者から積極的に話しかけられ、その質問に対し答えられるようになると少しずつ笑顔が出ている。高齢者の方たちも孫のような若い学生を相手に表情が生き生きしているように見える。施設のスタッフは、「ここは人と人の交流が生まれる場。ボランティアと利用者の出会いの場です。」と語り、ボランティアにきた学生も高齢者との交流を楽しんでほしいと願っていることを筆者に伝えてくれた。その後、大学で学生と会話する機会があり、「初日はすごく緊張していたけど、利用者の方の方が慣れていていっぱい元気をいただきました」と笑顔で話してくれた。次に活動の場に行ったときは、少し積極的になることができたという。

## ③事後学習

まず、中間報告会を後期の授業が開始して2週目の授業時（10月20日月曜日）に行った。11ヶ所の活動先ごとに分かれ、グループ別に座り、中間報告シートに現時点のボランティア活動状況を記述し、これまでの学びや不安だったことなどを文章化する作業を行った。シートを書き終わった後に、グループで意見・情報交換をし、この時間を利用して教員らが机間巡視して、学生の様子をうかがいながら必要に応じて教育支援に行った。事前学習の時、不安を抱えていた学生らも同じ活動先の受講生と笑顔でボランティア体験を分かち合う姿も見られた。まだ体験時間を達成できていない学生からは、11月の事後学習までに体験時間を達成し有意義な活動をしたいといった意欲的な様子が見られた。

中間報告シートの記述からは、この時点で約7割の学生が規定の時間を達成していたが、継続して活動を続けている学生がそのうち3割あった。



まだ体験時間を達成していない学生は今後の予定なども記述した。その後、活動先ごとのグループから代表で一人に中間報告をしてもらった。記述したシートをもとにした発表であったが、体験を通して様々な学びがあったことを察することができた。次に、教員から、今後の事後学習の予定を示し、事後学習の目標や評価の観点について説明した。授業の感想からは、「事後学習でボランティアから得た学びをより深めていきたい」など学習意欲を高めた内容が9割を占めた。事後学習の最終となる「報告会」で自分の体験を他者に発表することができるか不安であると記述した学生が1割あった。

事後学習1回目(平成20年11月17日)は、ランダムに分けたグループを構成し、活動先の違う受講生と活動体験を共有する時間を設けた。司会を決め、グループの全員が「肯定的な体験(喜び、楽しさ、幸福感など)」と「肯定的ではない体験(戸惑い、葛藤、苦悩、悲しみなど)」を発表し、共有した。学習方法としては、カードワーク法を活用し、カード(ポストイット)2色に記述したものをもとに発表し、共有する作業を行った。個々の体験を通して思ったことを自分の言葉で表現し、それを他者と共有する。体験先の異なる友人との語りの中で、共通する感情や異なる考えを持っていることに気づきつつ、自己のボランティア体験を通して学んだことを再考察する機会を得ていたようである。グループワークに参加する学生は、一人ひとりの語りに傾聴の姿勢を示しつつ、うなづきや相槌ちをしている姿も見受けられた。また、時間の経過とともに、活発な意見交換を行う様子も見受けられた。ふりかえりシートに書かれた感想の一部を以下に記す。

- ・自分とは別の所にボランティアに行った人の話が聴けてよかった。嬉しかったことや悩んだことなど自分とは違って新しい発見ばかりだった。また、その他のボランティア先がどんなところだったか聴けておもしろかった。

事後学習2回目(平成20年12月1日5コマめ)では、「ボランティア活動の光と影(陰)」のワーク

を実施した。このワークでは、前回のカードを用いて、「光=肯定的な体験」と「影(陰)=肯定的ではない体験」の再考を、グループ活動として実施した。特に、それらの体験が自分自身にどんな意味をもたらしたかについて語りあいながら、KJ法を援用しつつ、模造紙に整理していく作業を行った。グループでの共同作業を通して、私の体験から「私たちの体験」として共有化され、模造紙には、それぞれのグループが描き出した「光と影」がデザインされた。そのデザインをもとに、「大学生にとってボランティア活動とは？」という問いの答えを導き出す作業を行った。私的体験から小グループでの共有化、さらに、「大学生」という対象にとってのボランティア活動の意義についての理論を生成する作業を実施した。

事後学習3回目(平成20年12月8日)では、6つのグループのそれぞれのデザインの説明及び生成されたボランティア論の発表を行った。グループごとの発表を全員が共有した後に、担当教員から講評を述べた。担当教員からは、①ボランティアを通して何を学んだかを個々が明確にしていたこと②グループでデザインしていく作業を通して他者との交流、意見交換ができたことの意義③ボランティア活動での人との出会いが大きな影響を与えたこと④ボランティア活動の初心者だからこそ、感じることでできた重要な気づきがあったこと等が語られた。教員のコメントを聴く学生の表情は真剣であり、学生の活動をその場で評価することで学びを意味づけることと課題を投げかけることを通して共有することができた。ふりかえりシートの感想の一部を以下に記す。

- ・みんなでボランティアの体験を共有しながら「光と影」を作ることができ、とても充実した時間だった。ボランティアについて深く学ぶことができたように思う。
- ・先生からのコメントはとてもためになった。特に、ボランティアをふりかえることの重要性について気付かされた。ふりかえることで次につながるし、自分も成長できると思う。
- ・グループごとに違った視点やアイデアが生かされていてとても有意義な時間だった。

- ・「大学生にとってボランティア活動は何か？」という問いをグループのみんなで話し合う時間はとても充実していた。

事後学習 4 回目（平成20年12月15日 2 コマ分）ボランティア体験及びボランティアの事後学習を通して学習を深めたことについて報告する時間を設定した。3分間の時間制限があったため、体験やボランティアの授業で得たことなどを原稿に書き、発表するという形態をとった。発表にあたっては、資料として、活動先の簡単な紹介や感想・気づきなどを記したレジュメを準備し、当日配布するように指導した。報告会の準備は全員しており、一人ひとりがボランティア体験を通して学んだことを原稿にまとめて発表することができた。報告会の約半数の学生が事後学習で体験した「光と影（陰）」について自分の体験で整理し、そのことについての考察を含めて報告していた。また、活動先の事業目的を理解し、自分がどのような役割を果たしかを考察する内容で発表した学生が4割であった。

報告会には、子育て支援施設2ヶ所から3名、児童クラブから2名のスタッフが参加し、学生に、ボランティアを受け入れた感想や気づき、報告を受けての感想や応援メッセージをいただいた。また、他9ヶ所のボランティア受け入れ施設からは、ボランティア担当者によるメッセージをファックスやメールで送付してもらい、担当教員が代読した。受け入れ先のスタッフからのメッセージを一部紹介する。

〈B施設（NPO運営、高齢者・障害者・児童の地域における交流の場）のスタッフより〉

今日は報告会に行けなくてすみません。〇〇さんと〇〇さんの報告が聞けなくて残念です。2人はB施設の経験を通してどんなことを感じたのだろうと思いをめぐらせています。B施設には色々な方が来られます。本当にいろいろな方が来られます。個性が強い方ばかりというか…。私自身が身をもって感じているのは、B施設での出会いや交流は自分自身の人間性の幅を広げてくれるということです。こういう生き方や考え方もあるんだなと思ったり、私の価値観を揺るがす出来事もあったり、自分が試される場所

もあります。私が利用者対応するときは、私に会いに来てくれる人を増やしたいなと思いやっています。名前と呼ばれたり、私に会いに来てくれたり、挨拶をしてくれたりすると嬉しいです。それに「ほっとできた」と言ってもらえること、笑顔で帰ってもらえることが一番です。

人は人と人との間で生きているのだなとB施設で日々感じています。〇〇さん、〇〇さん、B施設に来てくれてありがとうございます。皆さんもよかったですらB施設に遊びに来てください。心からお待ちしています。

メッセージには、学生への労いや感謝の言葉、活動時の具体的な様子やアドバイスがあった。メッセージを聴く学生の目は輝き、自己の体験と結びつけながら聴いているように見えた。ふりかえりシートの記事からそのことについて述べられている部分を抜粋して紹介する。

- ・あたたかい言葉をいただきありがとうございました。時間を見つけてまたボランティア経験を積み、少しでも役に立てるようになってきたらと思いました。
- ・活動先のメッセージを聴きながら、自分がボランティアに行ったときのことを思い出しました。自分が何の役に立ったのだろうかというも不安でしたが、今日のメッセージを聴いて改めて自分の役割を考えることができました。
- ・ボランティアの必要性を強く感じた。
- ・ボランティアという立場であっても責任をもつことが大切であると再認識できた。
- ・A施設（精神障害者デイ）の施設長からのメッセージを受けて、ボランティアに行っても私たちが利用者さんと一緒に作業をして、そんな些細なことも利用者さんが嬉しく思ってくれるということを聴いて不思議な気持ちになりました。また、先輩方も何度も足を運んでくれるので私もその先輩達と一緒に通いたいです。私たちボランティアは行くことで利用者さんに潤いをもたらすと言われ、逆になんだか嬉しくなりました。継続性を持っていきたいと思います。

次に、報告会全体を通しての感想の一部を以下で紹介する。

- ・ふりかえって文章にすることでなおさら強い気持ちで見直すことができた
- ・それぞれが行った場所によって、気づきや感想が異なっ

ていると思いました。

- ・前に出ると緊張しましたが、自分の言葉で学んだことを伝えられて嬉しかった。ボランティアを終えて、一人ひとりが今回の活動をふりかえり、見つめ直して、考えを深めていると思いました。
- ・自分とは違った視点で活動をとらえている人もいてとても勉強になりました。

最終授業日には、受講生を対象に授業に関するアンケートを行った。ボランティア体験やふりかえり学習を通しての意識の変化を聞いた結果を図2に示した。学生がボランティアの授業を通して学んだことをさらに深化・発展させようとする意欲がうかがえた。自由記述には、今後の大学生活に学びを活かすための行動計画や意欲が具体的に記述されていた。

## 2 大学における授業としての「ボランティア」の教育方法と教育支援のあり方

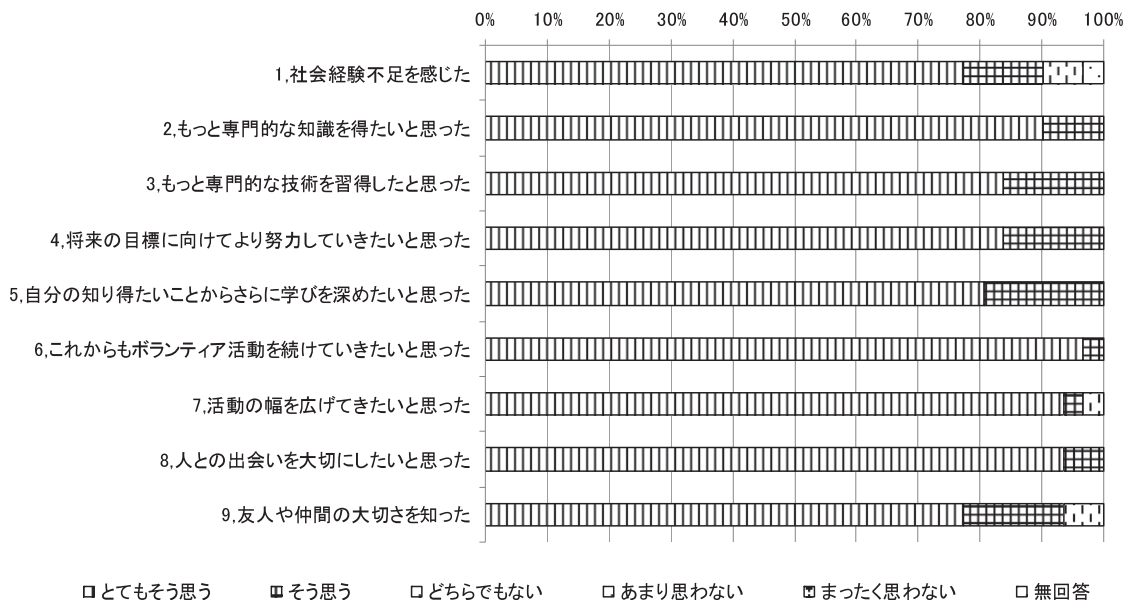
山口県立大学における「ボランティア」の授業実践から、教育方法について整理し、大学の授業におけるボランティアの教育方法と教育支援のあり方について考察する。

## 1) 授業における「ボランティア」の教育方法

### (1) 学習プログラムの全体構想について

ボランティア教育における学習プログラムを立案・計画にするにあたっては、大学の教育理念や目標あるいは全体の教育の中で、「ボランティア」の授業がどのような位置づけであるかをふまえた上で計画されることが重要である。その上で、受講する学生の実態(学年、ボランティア経験、専門分野、個々の関心や学びのニーズ)を把握し、教育内容を考案していくが必要になるだろう。また、ボランティア教育に特化された内容として体験学習を核としたP(Preparation=準備)・A(Action=行動)・R(Reflection=振り返り)の学習を組み立てる(長沼 2003)ことで、教育効果はより高まると考えられた。核となる体験学習の場は、関係を構築することが可能な団体・施設を選択したことが特徴といえる。特に、R(Reflection=振り返り)となる事後学習のプログラムの検討を積み重ね、学生が体験したことを意味づけていく作業過程を重視した。このような省察的な作業を取り入れることで学習の深化を図ることが可能になるだろう。

図2 ボランティア学習を通して感じたこと



また、学習の目標を明確にすることが、教育プログラムの内容を決定するために重要となる。そのためには、授業の達成目標を掲げ、事前学習、体験学習、事後学習それぞれの目標、授業ごとの「めあて」も必要になる。学生が講義や体験を通して「何を学ぶか」を明確にするためにも、アカンタビリティ（accountability）な視点を持ち、学生に提示し、フィードバック（評価）していくことも必要であろう。

全体の教育プログラムは「シラバス」によって学生に提示されるが、講義ごとの学習目標は授業時に口頭、版書、レジュメ等に示されることがよいだろう。本学の「ボランティア」の授業では、事前学習では、オリエンテーション時にシラバスを印刷し、目標を確認した。また、事後学習では、レジュメに「目標」を示し、学生が今日の講義を通して何を学ぶかを導入で提示した。さらに、その際、評価の観点についても説明し、個人の達成目標をイメージしながら学習にのぞむことのできる準備を行うことが重要であると思われる。

天野（1995）は「教育目標は、一定の順序と逐次、実現していくことのような分析が施され、具体的で明確な表現を用いることが重視される」と述べており、加えて、「目標は価値そのものより、その価値に至る過程を示すものである」とし、学習の過程を重視した教育目標の設定を強調している<sup>5)</sup>。教育という営みには、目標を掲げることが不可欠であるが、その目標や評価の観点を学生に説明することで、学びのプロセスにおいて、学生の意識の中に入り込み、学生自身が、より主体的に学習に臨むことを支援するだろう。

## （2）事前学習の教育内容と方法

ボランティア学習を展開するにあたって事前学習は極めて重要である。本学の授業実践においても5年間にわたって評価・検討を積み重ね、改善してきた。平成19年度から新たに取り入れた活動先を紹介した先輩との交流時間は受講生に好評であった。受講生が選択した活動先ですでに活動している先輩から多くのことを得ようとしている姿

が見受けられた。ボランティア活動の初心者にとって、初めての場所に向かうことへの不安を軽減させることや活動先でどんな活動を行うかの見通しを持つことが重要であろう。また、事前学習では、教員との出会いもある。本学では、中心になる教員（社会福祉学部教員）のほか、看護栄養学部、国際文化学部から1名、共通教育機構から1名のほかに、学外の非常勤講師との出会いもある。学生の感想からもわかるように、このような教員とのかかわりを通して学生のモチベーションを高め、不安を軽減させると考えられた。

導入教育となる事前学習の内容を充実化させることで、学生たちのボランティア活動に対する意識が醸成される。レディネスは、「ボランティアを活動の有無」といった経験的なものも配慮するが、むしろ、学習が開始されてから「ボランティア活動をする」という体験学習の前の事前学習時に形成されるレディネス形成に着目することが重要であろう。学習者の実態把握をある程度行い、そこから、学習目標に向かうための学習プロセスを通じてモチベーションを高めつつ、事前学習では、ボランティア活動に参加するための「準備」をすることができるようなプログラムが必要であると考えられる。教育という営みを通して、次の目標に導くべく教育を行っていくこと、学習者の学びの意欲をいかに引き出し、次の学習に進むための準備を整えていくことが重要であるといえよう。

## （3）体験学習の方法

ボランティア活動という体験学習では、その受け入れ先の開拓と関係構築が鍵になる。本学の場合は、社会福祉学部の実習や演習に協力いただいていた施設・団体、あるいは社会福祉学部にボランティア要請がある施設・団体の中で、特にスタッフや職員と関係を構築してきた団体・施設にボランティア受け入れを依頼したことに特徴がある。本学の基礎・教養科目として位置付けられている「ボランティア」の目的を共有し、同時に、受講生の実態を理解してもらう努力も必要であった。



また、体験学習では「記録」を書くことが重要であり、その記録は学生自身の省察的活動に深く結びつくものである。学生にはボランティア記録を記述するためのシートを配布し、事前学習で記録の書き方やその目的と意義について説明することで、目的を理解した上で記録を書くことが可能になるだろう。大学に戻ってからの事後学習では、体験を振り返ることが学習の主な目的になるが、活動を終えて時間が経っていることため、体験に近い水準に立ち戻るためにも記録は貴重な資料となる。また、個々の体験があるからこそ、学生が体験したことを記録として大学に持ち帰り、それを深めていくことで学習目標により近づくことができる。ボランティア体験は、地域を舞台とし、学生がより心と身体を動かす活動である。ここに教員は直接関与できないが、授業の一環として行ったボランティア活動を評価する資料としてもこの記録は有効であるといえよう。

#### (4) 事後学習の教育内容と方法

本学の事後学習は、中間報告も含めて5コマ分をあてている。事後学習の教育内容・方法によって学習の深まりは大きく変わる。したがって、事後学習の充実化を図るために、個々の体験をもとにした、グループ学習を行い、他者との体験の共有やボランティア論の構築の時間にあてた。グループ学習では、独自のワークを考案したことで、学生の実態とボランティア学習の性質にあった学習形態を選択できたと考えられた。ワークを開始した当初は緊張もあったが、次第に学生の生き生きとした表情や熱心な意見交換が行われていた。

また、その際、教員の指導力が学習を進めていくにあたって重要である。知識注入型の一方的な講義ではない学習形態は、学生の主体的な力を引き出すのに有効であるが、それには、教員のファシリテート力が必要である。特に、KJ法などのカードワークを用いて授業実践を行う場合、教員のファシリテート力は、学生が主体的に学び、問題解決や理論構築を行うための方向付けになる。

また、学生同士の交流機会が生まれ「分かち合

い」の時間ともなる。受講生の中には、「うまくいかなかった」「迷惑をかけたかもしれない」というマイナスのイメージも抱えて事後学習に参加しているものも少なくない。しかし、活動後の「分かち合い」の時間の中で、同様の体験者同士で「思い」を共有することで不安や悩みが軽減され、負の体験から自己の成長に結びつけようとする姿が見られるようになる。このようなグループのもつ力が発揮されることにより、学習がより豊かに意味づけられていくことが可能になるだろう。その後「大学生にとってボランティア活動とは」というテーマでグループの中で意見交換を行ったことにより、活動の後の学習者同士の経験の意味の共有・一般化を図ることができる。

また、体験学習活動による肯定的な学習イメージの獲得は、学生の後の学生生活に深く影響を及ぼすと考えられる。したがって、体験したことを学生一人ひとりが自分自身のものとして意味づけていくことは非常に重要であり、そこに、教員の教育的支援は欠かせないものであるだろう。

事後学習では、「体験」をもとにした個々のふりかえりを重視したグループワーク学習が準備されることによってグループのもつ力が発揮され、学びがさらに深化すると考えられた。また、学生が学んだことを言語化できるように「ふりかえりシート」を作成し、そこに表現できるよう仕掛けが必要である。さらに、言語化された内容を教員が読み、何らかの形で学生に返すことが重要である。本学の授業実践においては、ふりかえりシートを読んだ全体的な感想をフィードバックする程度であった。しかし、本来ならば、教員が一人ひとりの学習状況を査定し個人にフィードバックする、いわば、個人のアカウンタビリティを機能させることで教育効果はさらに高まると考えられるだろう。このように個々の学びや気づきに対する共感や悩みや戸惑いに対する適切なアドバイスも必要である。しかし、授業で展開されるボランティア学習の場合、授業時間内にそれを実践するのは難しいだろう。むしろ、担当教員との信頼関係を構築し、メールやオフィスアワー等の時間

を活用して、教員に質問に来ることができる等の方法をとることがよいと思われる。

#### (5) 教材開発及びボランティア教育に特化された教材研究

教材は教育にはかかせないものであり、教員の教材研究により授業の質が高められると言える。大学における授業においてもその授業で用いる教科書や資料、その他学習に必要な教材を効果的に用いることによって教育効果が高まるだろう。本学では、ボランティア教育に活用するための教科書を作成した。教養科目「ボランティア」にかかわる教員を中心に社会福祉学部の教員に執筆を依頼し、対象者別（高齢者、障害者、児童、障害児、精神障害者など）に分けて、ボランティア活動の実際と大学生ボランティアの役割について具体的に記してある。教材は、学生が講義を受けるにあたって必要なものだけでなく、関心を持ったものや理解を深めていくための副読本として有効であった。また、教員集団による教材開発のプロセスの中で、大学におけるボランティア教育の意義を再考し、授業や学生生活における教育支援のあり方を共有できる機会となった。

さらに、ボランティア教育に特化した教材開発について述べておく。授業におけるボランティアの学習展開は、体験活動を核にした事前・事後学習における教育方法や内容と連動させることが重要である。たとえば、事前学習においては、教科書だけでなく、体験する場の具体的な活動内容が示されることがのぞましい。また、学生にとって未知の世界である「体験すること」がより具体的にイメージ化できることが極めて重要である。その点においては、体験者による活動先紹介や体験談、受講生との交流機会の提供は有効であろう。

また、学生をボランティアとして受け入れる団体・施設の理解を教員自身が深めていくことや、地域の教育機能を高めるための調整や開発にかかわっていくことが求められる。あるいは、教員自身がボランティア活動を通して、そこから生成されるボランティアの理論を構築することも重要で

あろう。地域社会には、学生にとって多くの学ぶ要素が溢れている。学生の知的好奇心や知識欲を引き出し、ひいては、専門分野につながる体験、専門的な学習の深化・発展を期待する要素も含意している。このような学生の学びの場となる受け入れ先の施設や団体との信頼関係を構築しながら、受け入れ先にも学習目標を理解してもらい、学生の教育に共に携わっていくことができるようにアプローチしていくことも教員の役割であろう。

#### (6) ボランティア教育における評価の観点

ボランティア学習やサービスラーニングの評価に関する議論はこれまでも進められてきている。本学の授業における「ボランティア」の教育方法を検討する中で、学生の個々の学びが学生自身にフィードバックできるような評価を行うことが、有効であると考えられた。また、ボランティア活動という体験活動を核にした学びの展開の中で、学習過程に合わせた目標と評価の観点が準備され、その目標を受講生が達成できるような教育の方法を検討することが教員の責任でもある。

学生への成績評価は本学では「合」「否」の2段階である。「合」は60点以上とし、①出席点②規定のボランティア体験を行ったか③事前・事後学習の学習態度及びふりかえりシートの記入④報告会のプレゼンテーション⑤最終レポート、の5点を総合的に評価して決定する。しかし、学習者である一人ひとりの学びを質的に評価することはできない。この点に関して、教育方法で工夫した点としては、学生と教員が直接出会う授業時間を大切に、そこで、講義の目標を提示し、評価の観点についてふれることにしたことである。このような取組みにより、学習者自身の自己評価の記述がふりかえりシートに記述され、自己を見つめ、学習者の意欲を引き出す可能性が広がってきた。また、その自己評価を教員が目を通し、教育支援に活かすことができれば、指導と学習を調整し、改善する機能を高めることができるだろう。

本学の場合は、学生の実態をふまえて、授業に

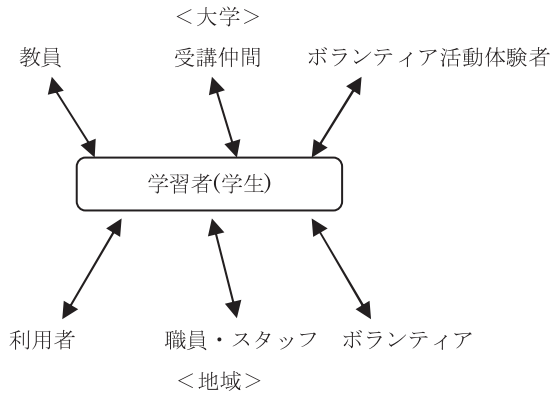
おけるボランティア教育をきっかけとして、受講生の今後の学生生活あるいはその後の生涯学習へと繋がる可能性を拡げていくことを重んじて、受講生には、ボランティア学習について肯定的な学習イメージの獲得が必要になると考えている。したがって、ボランティア活動の評価は、単なる「知識・理解」の獲得だけではなく、「興味・関心・意欲・態度」の観点を基本的・重点的に置くことが重要であることを提唱したい。この観点を重視しつつ、学習が進むにつれ、様々な学習活動を体験し、思考を深めていくことが重要である。また、活動先からの評価を学生にフィードバックすることによる教育効果は極めて高いと考えられるだろう。

## 2) 「ボランティア」の教育効果を高めるための人機能

授業における「ボランティア」の教育効果を高めるためには、これまで論じてきたように、学生の学びに深く関与し、その学びが受講生である学生にとって意義のある教育内容でなければならない。しかし、ボランティアの活動の性質に「相互性」があるように、ボランティア学習には「人との出会い」が大きく影響を与える。学生が出会う〈人〉は、授業で出会う教員をはじめとした学習を通して出会う人である。また、ボランティア活動の場は地域であり、そこで出会う人たちは学生の学びに深く影響を与える存在であると考えられる。そこで出会う人は、大学の授業の枠を超えた未知の世界にある人々であり、地域という舞台が学生の学ぶ場になるボランティア学習だからこそ、出会うことのできる人たちなのである。このような人機能が作用し、授業における「ボランティア」の教育効果を高める可能性を持っていると考えられる。

本学の授業実践からも、図3に示したような人達との出会いがあった。まず、大学では、「教員」「受講生」「ボランティア体験者（先輩）」との出会いと関係が構築される。担当教員の授業力量形成により、その機能は高まるといえる。教員は「計

図3 ボランティア教育における人機能



画する」あるいは「進める」人として、ある意味、ファシリテーター的な存在といえよう。また、教育内容を考案し、教材研究を行い、授業方法を工夫することで、一方的な講義形式の授業で終わらず、ボランティア体験者（先輩）との出会いと交流の機会が提供される。グループワーク等を効果的に導入することにより、受講生同士の学びあいや分かち合いの関係が生まれるのである。

地域では、ボランティア受け入れ先では、そこで働くスタッフや利用者たちとの出会いがあるだろう。体験学習であるボランティア活動により、学習者が直接的にその人達に出会うことにより、心を動かす体験をする。ボランティアの性質である「相互性」にもあるように、人と人とのふれあいや具体的なかわりを体験することができるだろう。この体験を通して、関係性の中に見る「光(=肯定的な感情)」や「影(=肯定的ではない感情)」に気づき、自己を見つめる体験ができたのである。ボランティア学習は、①自己理解②他者理解③社会理解<sup>6)</sup>であると定義づけられるように、他者との出会いがあるからこそ、その関係性の中で、自己を見つめる機会となるだろう。また、他者との出会いから新たな気づきや発見をすることができる。自分の知らなかった世界を知り、社会を知り、そこで生きている人、あるいは支援する人達の思いにふれることが可能になるだろう。



このことは、事後の学習における省察的な活動により学習者の新たな学びとして発見されるものもある。したがって、人との出会いの中で感じたことや気づいたことを、共に学ぶ仲間との体験を共有することは、体験学習において必要不可欠な時間となるだろう。また、大学の教員や先輩からのメッセージを受けることで、その学びはさらに意味づけされる。授業において、個の認知・動機付けに学習集団がどのような意義を持っているのかという観点から考えると、授業という形態の中で、ボランティアについて仲間と共に学ぶことの意義は大きいと考える。なぜならば、ボランティアは通常、個人的な活動として行うことが多いため、教育目標に向かって学習集団を形成しつつ、仲間と共に共有する機会を提供することが、学生の学びに影響を及ぼすからである。

### 3 大学におけるボランティア教育の可能性と今後の課題

本稿では、山口県立大学における基礎・教養科目「ボランティア」の授業実践をもとに大学の授業における「ボランティア」の教育方法論の構築と教育支援のあり方について考察した。近年、授業の中で「ボランティア」を学習する機会を提供する大学が増加傾向にある。また、高校においても単位化が一部進められている。小・中学校においてもキャリア教育と連動したボランティア体験活動の意義が再認識されている。大学全入時代と言われる今日、地域社会の一員としてあるいは生涯学習者として社会で生きていく人を育てる意味においても、ボランティア教育がもつ教育的意義は大きいと考える。教育観点から言えば、授業における「ボランティア」を学んだ学生一人ひとりの内的な動機付けに繋がり、その学習をさらに深化・発展させ、地域社会の一員として自覚と責任をもった行動、人や社会に積極的にかかわることができるようになってほしいという教員の願いが含意される。したがって、人や社会にかかわる活動をより自主的に行うことができるようになるために教育方法を工夫し支援を行う必要があると考

える。本稿でも強調してきたように、学習者がボランティア活動に対し、肯定的な学習イメージを獲得することができるような教育方法や個々の学生支援のあり方を検討していくことが重要であろう。このようなボランティア教育を充実させることで、今を生きる若者の発達課題に即した教育を提供し、学生のボランティア精神を涵養し、行動変容を起こす機会となる。このような教育的な機会の提供により、主体的な生涯学習者への発達も期待できる。

また、学生ボランティアを受け入れる地域の施設・団体との信頼関係を構築しつつ、連携・協働しながら、ボランティア育成をすることが課題であると考えている。一方で、ボランティア活動先も、ボランティアを必要とし、ボランティア育成の課題が課せられている。現時点では、これまでの関係の中で理解を得てきたが、今後は、地域社会の一員となる学生ボランティアの社会的役割を再認識し、大学と施設・団体が協働してボランティア育成の視点を持つことのできる仕組みも必要であろう。その点においては、大学のもつボランティアコーディネート機能と施設・団体がもつボランティアコーディネート機能を有機的に結合させる仕組みが必要である。大学と地域が、学生への教育活動を媒介に、日常的・継続的に連携することで、社会に貢献する人材を育てていくことが可能になる。このような期待を含めると、大学におけるボランティアの教育的意義は大きくなるだろう。

山口県立大学においては、社会福祉学部の開講科目や演習・実習の授業を通して関係を築いてきた施設・団体と学生ボランティア活動支援のための教育環境の整備のための知恵や工夫及びコーディネート機能を全学を対象としたボランティア窓口の設置やコーディネート機能と連携あるいは融合させ、その機能を質的に高めることが重要である。さらに、ボランティア教育にかかせない人機能を高めるために、教職員の指導力を高め、担当教員同士のコンセンサスを図ることや施設・団体などのスタッフとの密な連携と協力体制を組む



ことが課題となるだろう。

## おわりに

本研究は、山口県立大学における「ボランティア」の授業実践をもとに、教育方法論の構築に向けての試論を述べた。しかし、教育活動として企画・実践してきた学習プログラムについてその効果を実証的に分析・検証する必要性もある。本稿は授業実践者である筆者の主観的な考察も含まれている。また、本学のボランティアの授業の達成目標から、受講生のその後の大学生活にどのような影響を与えたか、ということまでの分析にはいたっていない。今後は、客観的評価、長期的評価の視点も取り入れながら、学びの主体となる学生にとって意味のある授業を実践していきたいと思う。本学のボランティア教育にかかわりながら、大学の専門教育と連動させつつ、ボランティア関連の授業、ボランティア教育環境の整備、教師の指導力等も含め、教育方法の検討を重ねていきたい。

最後になりましたが、本学のボランティア教育の展開方法について、社会福祉学部の加登田恵子学科長にご助言をいただきました。また、平成15年に「ボランティア」が正規科目として開講以来、国際文化学部のJ.A.T.D.にしゃんた准教授(平成15年度)、岩野雅子教授(平成16年・17年度)、吉村秀子准教授(平成18年度)、田村洋教授(平成19・20年度)、旧看護学部の三原博光教授(平成15・16年度)、旧栄養学部の安藤真美准教授(平成15・16年度)、看護栄養学部の中村仁志教授(平成17・18年度)、太田友子助教(平成18・19年度)、三谷明美助教(平成20年度)生活科学部、小川雅広教授(平成18・19年度)、地域共生センター、坂本俊彦准教授(平成18年度)、共通教育機構、松尾洋教授(平成20年度)に授業運営にかかわっていただき、協力いただきました。なお、平成17年度からの4年間、「やまぐち市民活動支援センターさぼらんで」の村林康彦センター次長に非常勤講師として本学に勤務していただき、事前学習における講義、活動先との調整や本学のボラン

ティア教育に有益なご助言をいただきました。ボランティアの受講生である学生らも多くのことを学びました。ボランティアを受け入れてくださった活動先の職員・スタッフや利用者の皆様にも多くのご協力をいただきました。すべての方々に深謝申し上げます。

## 注

- 1) 平成14年7月29日中央教育審議会にて「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の答申が出された。これを受け、大学におけるボランティア教育の関心も高まり、正規科目の設置だけでなく学生ボランティアセンターの設置やボランティアをコーディネートする担当部署も設けられている。
- 2) 例えば、立命館大学では、「地域活性化ボランティア」という正規科目を設置し、ボランティアセンターの開講授業として実施されている。ボランティア先の現代GP「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」報告書(立命館ボランティアセンター2008年)
- 3) 平成15年「ボランティア」の授業を終えた学生等から「日常的なボランティア活動の継続のための情報がほしい」「ボランティア体験を仲間と共有したり、相談する機会を得たい」等の相談を受けた。また、ボランティア情報を学生に効果的に提供し、演習・実習の授業との関連を考慮し、ボランティア情報の整理・情報の提供方法を検討する必要性を感じていた。これらのニーズから、学生を主体としたボランティアコーディネート機能を備えることを検討し、社会福祉学部教授会の協議を経て、「社会福祉学部学生ぶちボランティアセンター」を設立した。日常的な学生ボランティア活動支援の教育環境の整備の必要性を感じた。
- 4) 平成15年からこれまで毎年の授業実践をとおして評価・検討を行いながら授業としてのボランティアの教育効果を高めるための検討を行ってきた。「ボランティア」の受講生9割以上が社会福祉学部であることもあり、特に、社会福

祉専門職養成におけるボランティア教育について検討してきた。これは山口県立大学社会福祉学部紀要「福祉専門職養成課程におけるボランティア教育の位置づけと課題～山口県立大学社会福祉学部の取り組みから～」(2005年3月)にも纏めた。

- 5) 長沼豊は、体験学習の理論から学び、体験学習を核とした学習プログラムには事前・事後学習が準備されることが必要不可欠であると主張している。ボランティア学習には、P(Preparation = 準備)・A (Action = 行動)・R (Reflection = 振り返り) のサイクルを充実させ、循環させることが重要であり、体験をもとにした学習の深化を図ることが期待できる。
- 6) 平成19年度特色ある大学教育プログラムにおいて、社会福祉学部の「〈重層的学生支援教育〉による福祉人材養成～学生の成長課題と専門教育課題の有機的結合による福祉の人間力獲得を目指して～」(事業推進責任者：加登田恵子)が採択されたことを契機として、教育活動ならびに教育成果の社会的還元のために計画されたテキスト・シリーズのうちの一冊として「大学生のためのボランティア活動ハンドブック」(ふくろう出版2008)を出版した。執筆者は、社会福祉学部の社会福祉実習に関わる教員の他、基礎教養科目「ボランティア」に関わる教員が担当し、ボランティア教育の教材として作成したものである。
- 7) 前掲

## 引用文献

- 1) 坂口春彦、黒川雅代子 (2004) 「福祉現場での体験学習の有効性～実習事前指導の教育プログラムとしての有効性を中心に～」 龍谷大学論集
  - 2) 藤田久美、渡邊治子 (2004) 「実習レディネス形成に着目した福祉教育のあり方に関する研究～機関実習を中心に～」 山口県立大学社会福祉学部研究紀要第10号
  - 3) 山本佳代子、正司明美、藤田久美 (2005) 「社会福祉実習プログラムの検討」 山口県立大学社会福祉学部研究紀要第11号
  - 4) 藤田久美 (2005) 「福祉専門職養成課程におけるボランティア教育の位置づけと課題～山口県立大学社会福祉学部の取り組みから～」
  - 5) 天野正輝 (1995) 「教育方法学の探求」 晃洋書房
  - 6) 長沼豊 (2002) 「いまなぜ奉仕活動・ボランティア活動か」 『子どもの奉仕活動・ボランティア活動をどう進めるか』 教育開発研究所 長沼豊 「教育学におけるボランティア活動研究」 ボランティア活動研究題11号
- ## 参考文献
- 藤田久美編著 (2008) 「大学生のためのボランティア活動ハンドブック」 ふくろう出版  
佐々木正道 編著 「大学生とボランティアに関する実証的研究 (2003) ミネルヴァ書房  
北風公基 「日本におけるボランティア教育の取り組み～カリキュラムの指針の事例を中心として」 佐々木正道 編著 「大学生とボランティアに関する実証的研究 (2003) ミネルヴァ書房  
長沼豊 「教育学におけるボランティア活動研究」 (2002) ボランティア活動研究第11号 『特集・理論はボランティア活動をどう語ってきたか』 社会福祉法人大阪ボランティア協会出版部  
林幸克 (2007) 『高校生のボランティア学習 学校と地域社会における支援のあり方』 学事出版株式会社  
日本福祉教育・ボランティア学習年報Vol.9 (2004) 『地域を創る福祉教育・ボランティア学習』 万葉舎  
池田幸也・長沼豊 (2002) 『ボランティア学習』 清水書院  
日本福祉教育・ボランティア学習学会年報Vol.6 (2001) 『新時代の福祉教育・ボランティア学習を拓く』 万葉舎  
立石宏昭 (2005) 『ボランティアのすすめ—基礎から実践まで—』 ミネルヴァ書房  
日本福祉教育・ボランティア学習学会年報Vol.6

(2001)『新時代の福祉教育・ボランティア学習を拓く』万葉舎

## SUMMARY

### A Tentative Approach to Ways of Teaching “Volunteering” in a University Class

This study focuses on the educational methods used in the “Volunteering Class”-based volunteer practice held at Yamaguchi Prefectural University. The approach in which the students themselves deepened their learning through volunteer experience resulted in the following tentative plans. First, it is important that the lesson plans in a 15-lesson program be timed to heighten the educational effect, and teachers’ powerful leadership role as facilitators is recognized. Second, it is important to set up evaluation targets which are interwoven into the aims of the learning process. And by showing students the overview of targets and evaluation, the students can learn actively and can deepen their learning of the contents of study. Third, in order to perform volunteer education effectively, teaching-materials development and teaching-materials research are important. Fourth, it is important that volunteer education involve students in meeting people and relating to them while learning about human roles and functions. Finally, volunteer education programs require orientation and reflection segments before and after the learning units in order for students to maintain a positive image of the learning experience.